

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『きよだいな きよだいな』を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
辻・永田・高山・角・重富・阪本・西田・中村



題材とした絵本：『きよだいな きよだいな』 作：長谷川摂子 絵：降矢なな
出版社 福音館書店 初版年 1994年

タイトル：「きよだいな きよだいな」

配役：役者（辻、高山、西田、重富）、ナレーション及び撮影（角 永田 阪本）、BGM（中村）

担当：プロデューサー（角）、音楽（中村）、小道具（重富）、カメラ・音（角 永田 阪本）、報告書（永田）

1. 題材「きよだいな きよだいな」選定の理由

「きよだいなきよだいな」には、「きよだいな○○」というふうに大きくなった日常生活の中で出てくる様々な物が登場しており、その日常生活の中で出てくるものでの遊びということで遊びの展開が創造しやすいヒントがたくさんあると考えた。また、この題材は、「きよだいな○○」で100人もの子どもたちが遊ぶというストーリーが分かりやすく、絵本の中に出てくるたくさん子どもたちを自分達と捉え、想像がしやすく、様々な遊びを創造でき、一緒に遊んでいくことで、様々な対話の方法が生まれてくると考えた。

以上の事から、私達のテーマである「絵本を通じて楽しめる遊び」を4歳児に体験してもらうことに適していると考え、本題材を選んだ。

(辻)

2. 「対話的表現活動としての遊び」

私達は、対話的表現活動としての遊びを子どもたちと一緒に絵本の世界に入って身体を思い切り使って活動をしたり、対話したりして楽しむ活動であると考えた。そこで題材において、私達は子どもたちが「きよだいなきよだいな」の世界に入って遊べるよう絵本の中から楽しそうなものを数点選び、一緒に楽しむことができるよう以下のような表現遊びを考え

た。

- ・子ども達と一緒にジャンプや足踏みなどをしてそのタイミングでピアノの音を鳴らすことで画面の向こうにいる子ども達もピアノの音を聞いてリズムに合わせてお友達と一緒に思い切り身体を動かして楽しむ遊び

- ・大きな黒電話が登場する場面でペープサートとルーレットを作りルーレットを回して子ども達に「ストップ」と言ってもらい番号をみんなと一緒に言いながらダイヤルを回して電話をかけ、様々なキャラクターが登場することで子ども達も一緒に電話をかけているような、「次はだれが出てくるんだろう」というワクワク感が出る遊び

(阪本)

3.対話的表現活動で大切にしたこと

1つ目は、子どもたちの反応や、動きをよく見て声掛けをするだ。オンラインで繋いでいることで、子どもの性格に合わせた反応をよく見ながら声掛けをするのは、子どもを一人一人のことを知らない私達にとって難しいと考えた。非常に短い時間だったが、保育をしていく中でも子どもたちの様子を見ていくことが大切だと思った。

2つ目は、子どもたちが楽しめるように動きを入れたり、質問をしたりしたことだ。子どもたちがどのようにしたら楽しめるかは、私たちが一番に楽しまないといけないことや、活動の中で子どもたちに質問などを取り入れることが重要である。これは、全く知らない園でもコミュニケーションがどのようにしたら取れるかが活動がスムーズに行われるカギだと思った。

3つ目は、子どもたちとやり取りができるように、質問した時に間をあげ、子どもたちの答えを待つことだ。オンラインで繋いでいることで途切れたりしたことが沢山あったけど、子どもの反応などを待ってから次に進める、子どもの様子を見ながら私達の声のかけ方などが大切だと思った。

(角)

4.内容について

(1) 全体の構成

広い野原の真ん中に巨大なピアノ、巨大な電話、巨大な瓶など現実ではありえない空想の世界を描かれていて、想像力を豊かにするような絵本である。また、リズムカルなセリフ「あったとさ、あったとさ、ひろいのつばらどまんなかきよだいな〇〇があったとさ」があり、読み手も聞く側も楽しい気持ちになる絵本を使用し絵本のなかで遊びに発展しやすいものを選び子どもたちと一緒に楽しめる遊びを考え、工夫した。

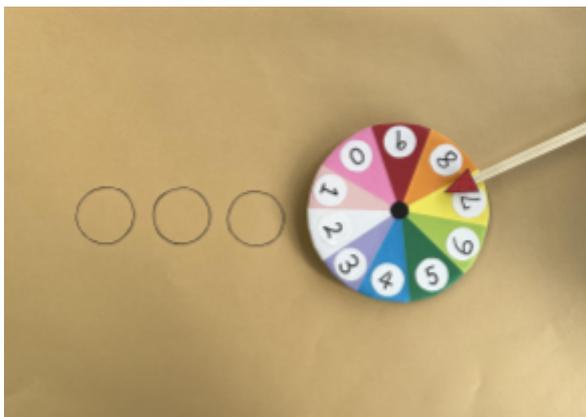


写真1 ルーレット



写真2 ペープサート

はじめはオンラインで繋いだ子どもたちへ声掛けをし、その後劇を始めた。場面が変わる事に絵本のセリフを言い、場面（遊び）が変わることを強調した。また、下記の画像のように小道具や子どもが楽しめるような工夫を施した道具を使用した。実際に黒電話を使用し、制作したルーレットで出た番号に電話をかけ様々なキャラクターのペープサートを通して子どもたちとのやり取りを楽しんだ。(写真1,2,3)

(西田・阪本)

(2) 子どもたちとの対話について

1回目の九州大谷幼稚園では、自分たちも初めてのパフォーマンスで、子どもたちが「また来てね！」や好きな番号を言ったりして、音声割れるくらい楽しんでくれていて、よく子どもたちが反応してくれていた。ただ、子どもたちがあまりにも大きい声で言うてくれたので、数字を決めるのにどうしても自分たちの聞こえた数字で決めていた。また、みんな走ったり歩いたりするのもみんな全力で歩き回ったり走り回ったりしていたと思う。

2回目の稚内大谷幼稚園では、1回目のパフォーマンスよりもなるべく子どもたちの意見を取り入れられるように番号を言うのではなく、ルーレットで子どもたちがストップと言う



写真3 題材に登場する黒電話

ことで子どもたちの決めた番号で数字を決めていた。また、稚内大谷幼稚園では椅子があつて、なかなかその場から動けなかつたりしましたが、その場で一緒に歩いたり、走ったりした。あまり通信の電波が良くなく、音声が届かないことがしばしばありましたが、映像は動いていて、ストップなどの声を大きい声でみんなで言っているなというのを感じた。

3回目の味坂保育園では、2回目よりも子どもたちの反応が良かったかなと思った。電話のシーンではその動物の名前など出てきたものを声に出していってみたり、手で耳を塞いでいる子どもがいたり、閻魔大王が出てきた時に「面白くない」と強がって言ってみたりしている子どももいた。終わってから、「まだ見たい」と言っている子どもがいたり、ジャンプしたりしてはしゃいでいる子どももいた。走ったり体を動かす時も、ぐるぐる保育室をみんなですり回っていたので、その時にキヤーなどの声が出ていた。

(永田)

(3) 演出の工夫 (道具や見せ方)

絵本のあつたときあつたときのシーンを実際に見せたかったので絵に描き、ピアノと電話とビンで遊ぶ前に絵を見せるようにした。

まず、ピアノのシーンでは跳んだら音がなってるという風にしたかったので役者の人達が



写真4 絵本をもとにした挿絵



写真5 絵本をもとにした挿絵

跳んだまらそれに合わせてピアノを鳴らすようにした。(写真4)

動作は子どもたちが動きやすいように、小さくジャンプした後に大きくジャンプ。そして、足踏み、歩く、走るという順番になるようにした。

次に電話のシーンでは、実物の黒電話を用意しペープサートを黒電話の前で動かすことによって黒電話が巨大に見えるようにしたことと、描いた子どもの絵をはることによって黒電話が巨大なものだと見えるように演出した。(写真3,5)

他にも、電話がかかる時に着信音をピアノで弾き、ペープサートでは表面と裏面では表情が違ふように作った。

更にペープサートの動かし方にもこだわった。河童は泳ぐように動かし、うさぎはぴよんぴよんとはねるなど出てくるキャラクターに合わせて動きを再現するようにした。

また、「何番にかける。」といった子どもたちに聞く場面ではルーレットを使うようにした。ルーレットは番号が見えやすいように白い紙を丸く切りその紙に番号を書くといった工夫をし、ルーレットがしっかり回るように下にハンドスピナーをつけた。(写真7,8)

最後に、ビンのシーンの時も実物のビンを用意した。(写真6)
 絵本のようにビンの中に入っているように見せたかったのでカメラの使い方にこだわった。ビンをカメラに近づけ、カメラを切り替えることによってビンの中に人がいると演出できた。

また、ビンのシーンは夜だと思って欲しかったので、背景が暗く見えるよう黒いゴミ袋をはった。小さい点滅するライトとずっとついてるライトをつけることによって星を表現した。実際に部屋の電気も消すことによって夜になったように見せることができた。(写真9,10)



写真7 作成したルーレット

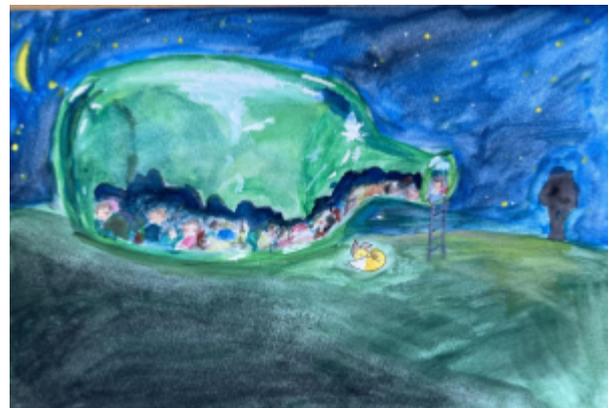


写真6 絵本をもとにした挿絵



写真8 ルーレットの裏につけたハンドスピナー



写真9 作成した夜の背景(素材:段ボール、ビニール、画用紙)



写真10 電気を消して、星のライトをつけた様子

(重富)

(4) 音と音楽

オープニングははじまり、元気に、ということイメージして作った。曲が長いと子どもたちも飽きると思ったので2回繰り返して次の場面に繋げるようにした。

ピアノの場面のジャンプでは小さくジャンプする時は高めで短めの音、歩く時はマーチっぽく、走る時はトリルのように2つの音を交互に弾いた。動きに合わせてピアノをつけることで子どもたちも動きやすくなったのではと思う。

場面の切り替えでは画面が白くゆっくり変わるのでそれに合わせて不思議な感じのピアノにした。

電話の呼び出し音は黒電話っぽく聞こえるように作った。また、1回でキャラクターが出るのではなく2回にすることで子どもたちも何が出てくるかワクワクして待っていられると思ったからだ。

ビンの場面のオルゴール風のピアノは2種類、星のキラキラした感じと子守唄風を作った。メロディーは同じでも、左手を変えたりオクターブ変えたりすることで、場面が変わったことを伝えられるようにした。

終わりはコントやアニメなどでも使われることのあるリズムを使用しました。そうすることで終わりがわかりやすくなったのではと思う。

プレ・パフォーマンスをしたことでピアノを入れるタイミングや音色などを考えることが出来た。

(中村)

(5) プレ・パフォーマンスにおける子どもの姿と省察

プレ・パフォーマンスを行って、電話番号は何が良いかを子どもたちに言ってもらった時、1人がひとつの番号を言うと、皆それに合わせてほとんど皆が同じ番号を言っていて、子どもそれぞれが思った数字を言って貰えるような声掛けが必要だったのかなと思った。子どもたちの反応が思っていた以上に良かったので自分たちも楽しみながら行うことができたと思う。また、子どもたちがそれぞれ番号を言うので自分達が混乱してしまい、収集がつかなくなり、そこからどう仕切り直したら良いのか分からなくなり、その反省を通して話し合った結果、電話番号を決めるための物をルーレットにしようという案が出た。(写真1)プレ・パフォーマンスを行うことでたくさんの改善点を見つけることができて良かったと思った。また、プレ・パフォーマンスを見た人たちの感想で、電話のシーンに背景があると良いのではないかという意見を見て、その意見を取り入れ本番に挑むことが出来た。周りの人からの意見を取り入れることで、より良いものになる事を学ぶことができた。(写真11,12)



写真11 絵本をもとにした挿絵



写真12 絵本をもとにした挿絵

(高山)

(6) 取り組む過程での改善と工夫

電話のシーンでは実際に昔使われていた黒電話を使用したり、ルーレットを作って子どもたちも一緒に楽しんでもらう工夫をした。また、黒電話に作った子どもの絵を切って貼るだけで実際に絵本に出てきた黒電話を想像しながら工夫して作った。(写真3) 瓶のシーンでは背景をダンボールや電球を買い、実際にプラネタリウムのような物を想像しながら作った。また、瓶のシーンでも実際の絵本に出てくる緑色の瓶を映し出した。その瓶をどんどんカメラに近づけることで実際にみんなで瓶の中に入っているかのように演出した。また、紙芝居を作ることで、絵本を用いずに絵だけで絵本の物語を再現した。自分的にはカメラを撮っていて満足だったので改善はないと思う。1回目で緊張のあまり、セリフを飛ばしてしまってた部分もあったが、2日目の前日にはみんなそれぞれの役割を見直し、話し合いをしながら練習をしながらできていたので、良かったと思う。

(角 永田)

(7) 子どもたちの様子と表現

今回の幼教こども劇場を通して、子どもたちの様子や行動に着目した。演じている自分達から見ると、オンラインという環境下で子どもたちは戸惑っている様子に見えたが、劇が進んでいくにつれて私達の声掛けに対して動いたり、会話をしたりと楽しんでいる様子だった。コロナ禍の中、普段の保育ではあまり経験することができないオンラインでの交流は子どもたちにとっても、とても良い刺激だったのではないかなと思う。また、劇が終わると「もう1回！」や「お姉ちゃんもう1回出てきて！」と言ってくれて本当に楽しかったのだろうと私達もとても嬉しかった。

(西田)

5.取り組みを通して得たこと

【辻】

今回、幼教こども劇場を自分たちでするに当たり、事前に去年の動画を観て、動画での先輩方のように自分たちは果たして子どもたちに喜んで貰えるようなものをつくれるだろうかとても不安だったが、どのように遊びを展開するかなど話し合いや小道具の準備、本番に向けての練習を重ねるにつれ、子どもたちが楽しんでくれるようなものをつくることができ、本番での子どもたちの反応から、子どもたちに喜んでもらえるような作品をつくりあげられたと実感できたので、良かった。

本番では、ハプニング等あったが、自分たちも子どもたちも対話を用いての遊びを楽しむことができた。

子どもたちの「楽しかった」、「またやって」の声を聞くことができ、とても嬉しかった。準備や、本番を通して、仲間と協力してなにかをつくりあげることの大切さや、決められた自分の役割を果たすことの大切さを改めて学ぶことができた。この経験から学んだことを生かし、これからの残り少ない学校生活や卒業後の職場等で活かしていきたいと思う。

【重富】

今回幼教こども劇場をするということで絵本を元に0から作り上げるのは大変だった。絵本の中からどれが1番遊びにつながられるかを皆で考えてこれがいいんじゃないか、これは遊びに発展しづらいのではないかと意見を出し合い、構成ができたならどんな道具が必要か？背景はどうするか？など皆で話し合いをした。

買い出しに行く人、道具を作る人、セリフを考える人など皆が役割をもち、行動、協力したことによって作りあげることができた。

プレ・パフォーマンスを通じたことで改善する所もいろいろでできたけど、皆がここ変えた方が良さそうだと意見をだしあえた事でよりいい物ができたと思った。

本番ではトラブルもあったけどピアノのシーンや黒電話のシーンで子どもたちと関わり合う中で子どもたちが「もう一回！」など楽しんでいる姿を見れて良かったと思った。

幼教こども劇場を終えて振り返ると、皆が自分の役割をもって行動することの大切さ、話し合いや協力することの大事さを学ぶことができたと思った。

【永田】

私が全体を通して思ったのは、私は初め絵本選びの方は実習が入り込んでいたので参加することができなかったのですが、カメラの操作役ということで、子どもたちの表情や様子、反応などを見ることができた。初めはすごく大変そうだなと思っていたが、作業などは予想どおりに大変だった。しかし、練習の様子はみんな協力することで楽しさもあった。自分が子どもたちの前でするということはなかったが、画面を見ていて、実際にカメラに出ている人と同じような緊張感で望むことができたと思う。責任実習は子どもたちの前で1人でやるが、またそれとは違い、チームのみんなでするので違った大変さもあり、それぞれの役割をもってできたことが良かったなと思った。子どもたちからもいい反応がもらえてよかったなと思った。自分はあまり参加することができなかったが、周りの友達に教えて貰いながら色々支えてもらっていたので、本番では無事にパフォーマンスができたのかなと思った。

【高山】

今回の幼教こども劇場を通じて、まず、どの絵本を元にしたら子どもたちと関わる事が出来るのか、遊びに繋げることができるのか、などというところから始まり、グループの中で沢山意見を出し合いながら準備を行ってきた。意見の食い違いや、準備の時に皆が揃うことが難しかったグループだったが、人数が少ない時も、協力し合いながら準備ができ、チームワークの大切さを学ぶことができた。この授業があったからこそ、責任感を持つことの大切さを学ぶことができた。

また、他人任せにせず、今自分ができるとは何かを考えて行動したり、自分の思った意見を出したりすることの大切さを学ぶことができた。

プレ・パフォーマンスで初めて園と繋いで行った時の反省点を本番までに意見の出し合いを行い、様々な改善点が出てきて、本番のギリギリまでに仕上げたりとても大変だった。本番を迎えて、子どもたちの「楽しかった」や「まだ遊びたい」など素直な反応や感想など聞けて、皆で頑張った良かったなと思った。

【角】

今回初めてこども劇場を実施するにあたり、リーダーを誰がするかを決めるときに、私がリーダーを頼まれた。周りの友達が一緒に頑張ろうなどの声かけをしてくれた。その時はとても嬉しかったが、いろいろな作業をしていく中で人間関係がとても難しかった。途中人間関係が崩れた時もあったが、みんなで最後までやり遂げることができたのはとてもよかったと思う。

そのほかにも、プレ・パフォーマンスをするにあたってやっぱりこうした方がいいんじゃないとカメラの位置を変えたり、電話の時の背景をどう写すか、ルーレットはどこに写すかとかの話し合いをしてとても大変だった。1日目にした時は失敗があってみんな反省点があったけど、2日目は1日目の反省点を活かして成功させることができたのでとても良かったと思う。

【阪本】

今回の幼教こども劇場を通して、沢山の反省や学びがあった。私は練習にあまり参加できておらず、人数が少ないなかグループの皆が絵本選びを行い、物語のなかで遊びに発展しやすいものを考え構成し、製作などの準備をしてきていた。本番までの練習でみんな意見を出し合い改善点を見つけ作業や話し合いをしていくなかで自分の意見を伝えることができなかつたり何をすればいいのか聞くことができなかつたりしたので話しかける勇気を出して話し合いにもっと積極的に参加できていたらよかったなととても反省したし、改めて自分のそういった短所を直していきたいと強く思った。

本番では失敗もあったが、子どもたちの楽しそうな表情や怖がっている表情、驚いている表情などが見られ、様々な反応を見ることができた。劇が終わった後に子どもたちから「楽しかった！もっと遊びたい」という言葉を聞くことができてとても嬉しく思った。プロデューサー、ディレクター、絵コンテ、音楽、道具、会計、役者、演奏、カメラ、映像、記録報告などの役割がありグループ全体で協力して支え合いながら一人ひとりが責任感を持って行動することの大切さを学ぶことができた。

【西田】

幼教こども劇場を通して、まずは絵本を選び、そこからどのように劇を作っていくのか0からのスタートだった。「きよだいなきよだいな」はリズムカルなセリフもあり、絵本自体が子どもが興味を唆る内容で劇にはピッタリではないかと思った。はじめに役割を決め、そこから劇の構成を考えていった。また、今回はオンラインでの交流だったのでカメラの切り替えや画角などオンラインだからこそ考えることが多かったのではないかと思う。カメラ役や音声、役者と各々大変なことはあった。

劇の構成が出来上がってきてセリフを覚えて私は実際に役者として劇に出た。オンラインで子どもたちとどのように会話(受け答え)をするのが1番の考えどころだった。また、途中で回線が不安定になったらどうするのかなど、問題点がいっぱいあった。その点に関しては、先生方から助言をもらい、改善点を見つけていった。プレ・パフォーマンスと幼教こども劇場の本番の2日間はとても緊張した。プレ・パフォーマンスを行ったからこそ、本番の2日間はトラブルもあったが充実した2日間になった。

今回の幼教こども劇場を通して沢山のことを学んだ。まずは班の皆で劇を成功させること、子どもとオンラインを通してどのように受け答えをするのが1番の課題だった。この経験を通して実際の保育現場でも役立つことが多々あるのではないかと考える。

【中村】

今回、幼教こども劇場を実施するにあたり、1から自分達でものを作り上げることの大変さ、難しさを知った。1番難しいと感じたことは「子どもたちとの対話」だ。劇をするだけなら簡単だけど、子どもたちとの対話を混ぜながら作るのはとても難しかった。どうやったら子どもたちも楽しく見てくれるか、遊んでくれるか、メンバーみんな意見を出し合いながら考えた。しかし、実際にプレ・パフォーマンスで子どもたちとオンラインで繋いでやってみると、子どもたちが戸惑ってしまったり、上手く子どもたちにこちらの思っていることが伝わらなかったりして、課題が山積みであることを感じた。本番までの2週間で新たに小道具を作ったりなどできるだけ改善をして本番に臨んだ。1回目は後半トラブルがあり、みんな動揺して思うようなパフォーマンスができなかった。1回目の改善点等をみんなで打ち合わせをして、2回目は大きなトラブル無く終えることができた。終わってから子どもたちから「もう1回したい!」「楽しかった!」などの声が聞こえてきて、とても嬉しかったし喜んでもらえたと思えた。

この経験は、保育現場に出ても絶対に役立つと思うので大切にしていきたいと思う。